

〈序論〉

○研究動機・研究目的・研究方法

ハンドボール競技における1対1の突破は、攻撃が得点につながる重要なプレーであり、基礎技術であり有効な戦術でもある。また、突破を試みることでノーマークになり味方のチャンスを作ることも可能である。それほど突破は、ハンドボール競技において重要な戦術的行動であるが、それらを実践するのは容易なことではない。筆者は、中学生からハンドボール競技を行ってきた。体格が小柄だったため、フェイントプレーを中心とした1対1で突破をして得点を獲得する選手として頑張ってきた。しかし、レベルが上がるにつれ1対1の突破も難しくなった。そこで、1対1の突破力を向上させるにはどうすれば良いかと悩み、世界のトップレベルの1対1の突破の動きかたを観察・分析したいと考えたことが今回の研究動機である。

本研究の目的は、1対1の場面における突破の構造を運動モルフォロジー的視点（マイネル, 1981）から明らかにしながら、1対1の突破を類型化していくことである。この際、2015年世界男子ハンドボール選手権でベスト4以上の試合4つ（フランス、カタール、ポーランド、スペイン）を対象とし、全ての1対1での突破の場面の印象分析を行いながら、典型的なプレーを抽出し編集し、類型化を試みた。また、観察する際には筆者だけで的分析では主観的な考えになってしまうので、他2名（指導歴36年S監督、競技歴11年U選手）に協力してもらい「共同観察」（佐藤, 2015）を行い、間主観的客観化を試みた。その際、「縁どり分析」（金子, 2007）を拠り所にして、突破の動きかたの構造を明らかにして名称をつけた。

〈本論〉

○ゲームの運動観察法について

本研究では、ゲームの観察法として運動モルフォロジー的考察法を基にした「共同観察」を用いる。その際、他者観察の不可欠な前提となる印象分析を行い、運動経過を間主観的に捉え、運動共感できるようにする。さらに、あたかも実際に自分が動いているかのように観察する自己観察法も用いる。その中で、1対1の突破の構造を観察する上で重要であると考えられるマイネルの運動カテゴリーのうち、特に「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動の先取り」の視点から分析し記述を試みた。さらに「縁どり分析」を行い、一連の突破の構造を明らかにしていく。

○1対1の突破の構造

1対1の突破は、「縁どり分析」に基づく、①「位置取り」、②「調節走」、③「キャッチ」、④「フェイント」、⑤「突破」といった特徴的な動きかたから成り立っている。

また、観察を進める中で、ボールを保持していない場面での突破は、「①→②→⑤→③」と連動するものを「直進系」、「①→②→④→⑤→③」と連動するものを「策慮系」とした。さらに、ボールを保持している場面での突破は、「①→②→③→⑤」と連動するものを「直進系」、「①→②→③→④→⑤」と連動するものを「策慮系」とした。このボールを保持している場面の「策慮系」は6つに類型化することができた。その結果は以下のようになる。

● ボールあり I 直進系(フェイントなし)

II 策慮系(フェイントあり)

- ① ストライドフェイント突破
- ② オーバーハンドフェイント突破
- ③ ローリングフェイント突破
- ④ ボディフェイント突破
- ⑤ シュートフェイント突破
- ⑥ パスフェイント突破

● ボールなし III 直進系(フェイントなし)

IV 策慮系(フェイントあり)

例えば、II①ストライドフェイント突破は、マイネルの運動カテゴリーのうち、特に「運動の局面構造」、「運動リズム」、「運動の先取り」が際立って観察することができた。そして、「走る形態」(調節走、側進走、反転走)と「捕る形態」との適切な組合せが観られた。そこには、キャッチの終末局面とフェイントの準備局面とがスムーズに組み合わせさせた「融合形態」が存在していた。その際、からだ一つ分の“ずれ”をつくることで、敵方を引きつけて切り返していることが突破に繋がっていると分析できた。

〈結論〉

本研究では、ハンドボール競技における1対1の突破の構造について、2015年世界男子ハンドボール選手権における典型的なフェイント突破を観察・分析・記述することによって、その類型化を試みてきた。その結果、1対1の突破の構造を明らかにし、それぞれ特徴的な動きかたを6つに類型化できた。1対1において、フェイントは突破に繋がる重要な動きかたである。オフェンスプレイヤーは、ディフェンスの状況や敵方の動きかたに応じて瞬時に判断し、フェイントを選択し実行することが求められる。それぞれのフェイントの特性を理解し、練習において反復練習することで、試合のなかで発揮されるように準備することが重要である。同時に練習のなかで本人なりの動きかたの要領、すなわちコツやカンを見つけ出すことで、本人ならではのフェイント突破となり、自身の競技力が向上に繋がってくる。このように、1対1の突破の幅が広がると、チームの競技力向上にも繋がると考える。

(引用・参考文献省略)